

位の大きな黒い煙筒が砂塵の中に倒れるのが見える。それはあまりに心地よく倒れた。見て居る私は嬉しかつた。何と上手に倒すことよ。破片も送らず 爆発もささず それは完全に一本の箸の如く倒れた。見て居る私は その天を摩す煙筒が惜しいと思はぬではなかつた。然しあまりに心持ちよく倒れたことを見て雀踊りした。

あゝ あそこから東京が甦るのだ。あの爆音の底から新しい日本が甦るのだ。古い燻ぶつた煙筒を綺麗に片付けて そこから東京が甦るのだ。爆音が一つ轟く度毎に 私は神田の高い塔からそれを凝視した。そして その砂塵の中に新しい芽が見えるか否かを窺つて見た。その元氣善い爆発に 私は新しき生命の爆音を聞いた。

腐つた建築物はみな去るが善い。新しい東京はトタン屋根の下から甦るのだ。

火焰の旋風に翼を焼き落された鳳凰は灰燼の中より甦る。苦難を通過した鳳凰は火焰を喰ひ尽す術を知つて居る。

あゝ 鳳凰は灰燼より甦る！ (一九二三・九)

## 灰燼の中に坐して

九月二日の朝刊をみた私は その朝同志に機を飛ばして その日の正午に神戸山手の青年会館に集まり 関東救援の協議を遂げ 我和福音教会の佐藤君の二人は その日の午後四時に出る救援船山城丸に便乗することになつた。

九月三日の正午に 船は御前崎の真正面を急行してゐた。そしてその日の午後四時頃大島を見て通つた。大島は爆発も何もして居ら

なかつた。

船は午後八時半頃横須賀の火焰を見乍ら横浜に入港したが 港内からは何の消息もなかつた。たゞ軍艦のサーチライトと コレア丸の発火信号が急がしく瞬きして居るのを見ただけだつた。

横浜は未だ三箇所に火が燃えてゐた。その中でも神奈川のライジングサンのタンクが最も盛に燃えてゐた。その焰に二本筒のコレア丸の暗影が絵の如く水面に浮び上つてゐた。

その晩は特に暗れてゐた。それなのに横浜は死せるが如く沈黙してゐた。船は遂にその夜何等の消息を港内から得ることなくして港外に碇泊した。

一晚横浜港外に捨て置かれた山城丸は九月四日の朝未明に港内奥深く這入つて行つた。

横浜ドックに上陸した私達は、ドック会社の破壊のあまりに根本的なのに驚かされた。工場と云ふ工場 機械と云ふ機械 殆ど完全なものをも一つも見ることが出来なかつた。火災の余燼は九月四日の午前十時に到つても猶熄まないで その悲惨な光景は言語に絶してゐた。まるで戦跡の廃墟を訪うてゐるやうであつた。ドック会社の入口で群馬県の警部を初め巡査数名が看視してゐるのに会つた。

焼け残された車の上で 税関倉庫から失敬して来た雑貨を配分してゐるのを見た。倉庫は全部解放したために 殆ど掠奪の心持ちで群集が雪崩れ込み 各自に争鬭を始めたと云ふ。

桜木町から横浜駅に出て驚いたことは横浜が端から端まで丸裸のやうに瓦礫に化してゐることであつた。そこは文字通りの瓦と煉瓦石の沙漠で 家らしい家は山手の方に所々見えるだけであつた。街

が茶褐色に焼けてゐるのに 山が青々と繁つてゐるのを見るのは変な気分であつた。

街上で驚いたことは凡ての人が武装してゐることであつた。或者は太刀を帯び 或者は竹槍を担ひ 或者は棒の先に幾百となく釘を打ちつけたものを運ぶなど 私は五年前の米騒動の再現を見るやうな心持がした。

東京までは全く徒歩で道を急がねばならず 九月四日の太陽はまだ盛夏のその如く照り付ける。建築物と云ふ建築物で 残つてゐるものは殆どない。たと不思議にも横浜市の職業紹介所の建物と市社会館の建物が立派に残つてゐる。市七万戸の内約三千五百戸しか残つて居らぬとのことである。

東神奈川から子安、鶴見を経て六郷川に達するまで幾万の避難民が往来してゐる様は実に凄いやうであつた。言葉を変換してゐる人さへ少い位である。東神奈川は震害が少いやうであつた。然し両側の家と云へば押し潰れたもの 曲りくねつたもの等が随分沢山だつた。道路の陥没 亀裂等は本横浜に於て想像以上であつたが 郊外は比較的破損の程度が甚だしくなかつた 川崎町あたりで喉の渴をいやす為めに 梨を買ひ求めて食つたが この地方の人々は普通に商売をしてゐた。

六郷の鉄橋のほとりに 幾千となく避難民が臨時列車を待つてゐた。年寄 子供 赤ン坊を背負ふたおかみさん 学生 実業家 殆ど凡てが食糧を携帯してレールの側の砂礫の上に坐つたり寝転んだりしてゐた。

天災の痛手に憂ひ顔もせず 静かに汽車を待つてゐた。私達は側

に捨てゝゐる電車の中に這入つて休んでゐた。各地から人々が集まると共に色々な経験をして来た人が互に語り合つてゐる。

六郷川から汽車を除行して品川まで約一時間もかゝつた。私達は品川から芝白金の明治学院に行く積りで台町の方へ登つて行つた。市内は真暗で 一町おき位に青年団が警護網を張つてゐた。明治学院構内も真暗であつた。最初凡ての人達が避難したことだと思つて帰りがけたが また思ひ直して私の友人でダンテの研究者である中山昌樹君の家を叩いてみた。そして同君の一族が避難もしないでそこに居ることを発見した。然し何故蠟燭の火もつけしないで戸を締め切つてゐるかと思ふ理由は翌日になつて 彼が物語つた。それは日本語の十分出来ない××の留学生を預つてゐる為であつたのだ。

品川駅の前などでは幾千の婦女子が野宿してゐるのに 附近の有産階級の大邸宅は門を閉ざして人を入れないで居る有様を見た私は上流階級の無慈悲に憤慨したことであつた。實際堪らないほどだつた。

九月五日 私は芝三光町を抜けて 赤羽根橋の方へ被害地視察に出掛けた。そして芝公園から西部は全く安全であることをみた。目黒行の電車通に茅暖藤で屋根を造り障子で周囲をかこんだ小屋を幾百か見た。その中には連日の疲れでぐつたりしてゐる男女が 平蜘蛛のやうに打倒れてゐるのを見た。

其公園を東に出ると そこから桜田本郷町まで見通す事が出来た 桜田本郷町の日比谷側は焼け残つてゐた。然し横浜をみて来た目にはまだ何となく東京のそれは惨憺ではなかつた。横浜には煉瓦壁などで完全に立つてゐるものはなかつた。東京にはその立つてゐる

ものが多かつた。つまり東京の被害は地震よりも火災によるものが多しことを私はすぐ氣附いた。

丸の内にかゝると驚いたことには木造の勸業銀行も華族會館もビクともしないで立つてゐた。東京は矢張り木造の家が最も適するのではないかと私は考へた次第である。ライト氏の建てた帝國ホテルは無事に立つてゐた。たゞボーチが心持ち南側に傾いてゐるのに氣がついた。材料になつた大谷石とか云ふのは火山岩で軟い部分に水に溶けて穴があくけれども火災には強いさうであるから大丈夫であつたらしい。警視庁も帝國劇場も表側だけは立つてゐるが内側は丸焼けになつてゐた。そこに雲で色々な楽書をしてゐるのは避難民が自己の姓名を記したものらしい。東京日日の立つてゐる附近には部分的に焼失してゐるものも有つたが多くは大丈夫であつた。

青いお深の水が焼残つた赤土色の瓦や煉瓦石に映えて今は特別に美しく見えた。馬場先門のお深の石垣の崩れた所で若い女達が貞裸になつて行水をしてゐた。そこが日比谷の中心なので平常の時と比較して考へてみて奇妙に感じた。普断ならば綺麗羅を飾つて帝劇にでも出かけて行く東京の娘が今日は命から逃げ出して馬場先門で素裸になつて行水するなどと云ふことは考へても及ばないことである。然し旧約の予言者イザヤの文でも読んでゐる心持で私はそれを見て通つた。私はそこから東京市聯合の臨時震害救済事務の模様を見に行つた。幾つかの天幕を張り廻らして大混乱の情態であつた。吏員もみな氣が氣でないらしく秩序がありさうにも見えなかつた。庁舎の入口はガソリンの鏝で一杯になつてゐて銃剣を

つけた兵士が立番してゐた。私は当局者に會つて挨拶をした。当局の云はれるのに米は十分だが金その他の物資が不足して居る。殊に秋に向つてゐるので古着などが大に欲しいと云ふことであつた。

神田橋が地震で落ちたので中央停車場の東北にある新常磐橋に廻らねばならなかつた。幸にも浅草へ行く市方面委員係に私の友人が有つたのでその人に伴はれて私は神田に出た。外濠には幾隻となく死体で充滿した船が沈んでゐた。神田橋が通じないので迂回するのが面倒臭い若武者連中は水道鉄管の上を馬乗りになつて渡つてゐた。それが一本しかないで丸の内へ渡り初めるとその方向が幾時間も続き神田へ渡り初めるとその方向が幾時間も続くといふことであつた。

神田に来ると上野の森があまり近く見えるのに驚かされる位であつた。と云ふのも神田と上野の森の間を遮る何物もないからであつた。

一つ橋の南科大学も赤い煉瓦壁だけが残つて焼けてゐる。救世軍本營も地震の爲めに倒れた。そして山室軍平氏は負傷して辛うじて逃れ本營の指田氏も酒井氏も死したと云ふことを聞いた。

神田の青年會館では焼け跡に山本総主事始め石田友治君三輪トクトルその他十数名の学生諸君が救護班を組織して活動を始めようと云ふところであつた。

焼け残つた前の石段の上に立つて石田君が絶望的な大きな声でひとり讚美歌を歌つてゐた。私が近寄つたので驚いてゐた。

「箱根を越えて来たのかい？」

「いや 船で横浜に来た」

みな私等の来たのを見て大に喜んだ。私は東京市の復興に就て眼前の救済に就て 互に打合せをなし 灰燼の中に坐つて共に祈つた。「主よ 東京を灰燼の中より再興し給へ」と祈りの後直に上野公園のミルク配給の模様を見に行つた。恰度その時 早稲田の教授帆足理一郎君も見えたので一緒に上野まで歩いて行つた。

数人の奉仕的な青年諸君はコンデンスミルクを数十個とバケツ数個を新しい荷車に乗せてそれを上野まで曳いて行くのであつた。私はその姿をみて実にうれしく思つた。永遠にこの姿で居て欲しいと思つた。

小川町からみると 駿河台のニコライ聖堂の焼け跡が 何か我等に物語らんとしてゐるかの如くつくねんと立つてゐた。

去年の春戦後初めてあしこを開いて讚美礼拝をした時に 私もあしこに礼拝に行つた。鐘があはたよく鳴り 太いベースと高いテノルの諧調の美しい讚美歌に涙ぐましい程 聖堂の再開を喜んだのであつたが 今はまた永遠にその鐘と その讚美歌が沈黙したと思ふと淋しくなつた。

吹き上げる砂埃に 病める私の眼は 開けることが出来ない。私のボテ靴が足のさばきを鈍らせ 亜鉛板の下に倒れるやうに寝てゐる避難家族の数々を見るにつけても 私は江戸以来の凡ての文明が全く亡びて了つたことをつくづく考へた。

上野の広小路に出ると 人出はまるで花見時のやうであつた。公園に這入る人 公園から出る人 その数の夥しいこと 博覧会の時でもそんなに多くの人を見ることは出来なかつた。

公園内の自治館は今下谷区役所になつてゐた。その壁にはキリスト教青年会の学生諸君が尋ね人を探す人の便を計るために何千枚かの半紙に 行方不明者の姓名を書かせて それを貼りつけてゐた。五分間に数十人の人がそれを書いて行つた。或者はその半紙を指して 尋ね人の判明したのを喜んでゐた。青年諸君は水を汲んで来て バケツにコンデンスミルクを溶かし 小屋に運んで行つた。私は一刻も早く 関西に帰つて 京阪神の同志に模様を報告し 物資を送ることを約して 日暮里に出ることにした。

上野の高台に立つて 浅草 本所 深川の方面を見ると それは誠に怖ろしい光景であつた。焼かれた屍が三々五々 そこらあたりに散らかつてゐる浅草から吉原あたりまでは焦土の平原に化してゐる。その上を西に傾いた太陽が反射して まるで黄河の微波を見るやうであつた。実際 私は東京のあまりの変りかたに驚いた。それは破壊の好きな支那で見られる光景であつた。浅草の十二階は半崩れで 支那の内地によく見る半分毀れた塔の如く見えた。唯驚いたのは 浅草観音の大屋根が巖然として立つてゐることであつた。

其山門も五重の塔も完全に立つてゐたが 浅草の伽藍も完全に建つてゐる。その時すぐ私の頭に浮んだことは 信仰で建てたものは強震にも耐えると云ふことであつた。信仰と 正直と 忠実を以て建てなかつた明治 大正の建築物は凡て振ひ落されて了つた。そして増上寺の五重の塔と 上野寛永寺の五重の塔と 谷中の五重の塔と 浅草観音の大伽藍は空に聳え立つて 明治 大正の文化を笑つて居る。それらは東京の滅亡するのは あまり当然だと云つたやうな顔をしてゐる。そして それらの魂を持つ建築物がさう云つても

我等はそれに對して抗議する權利は全く無いのである。

日暮里駅は人を以て埋まつてゐた。発車の時間が近づくと共にプラットホームは人で一杯になつた。列車は来たが田端から先廻りをして乗つて来た人で満員になつてゐた。たゞ残つてゐるのは屋根の上と更に無理して窓から侵入することであつた。然し私はその危険を思つた。一夜眠らなくても覺りの来る私の眼球と少し押されると思進する私の心臓を持つて居て、腦貧血を再々経験する弱い私がとてもその群衆に勝てる望みはなかつた。六時間の示威運動の行進に日射病で四十度の熱を出して二日も倒れた私が三日間も列車の屋根の上で揺られつゝ神戸に帰れる望みは無いと思つたから私は列車で神戸に帰る望みを放棄した。私は五日かゝつても六日かゝつても窄る箱根を越えて帰るか再び横浜に出て船で神戸に帰らうと決心した。

後で判つてうれしく思つたのはその日(九月五日)日暮里から乗つた人達は長野に着くまでに六人も列車内で押し潰されて死んだと云ふことであつた。また碓氷峠のトンネルの両側には揺り落されて死んだ屍が幾十となく散らばつてゐたとも聞いて、横浜に引返したことを自ら賢い道を取つたと思つた。私はそれから日本橋通りを真直に銀座に出た。三越の前には女の黒焦げになつた死体がまだその儘になつてゐた。それが埃及のミイラのやうに見えて、あの大建築と見較べて何とも云へぬ悲愴な感に打たれた。日本橋や銀座の大きな建物は凡て焼けてゐた。私はキリスト教書類会社が凡て焼けて、まだ盛んに余燼が燃えてゐるのを見た。殊に私と密接な関係のある警醒社はどうなつてゐるかと思つて、焼けた跡をのぞいて見ると

火はまだ赫々と燃えてゐた。私はそれをみて、自分の書物も紙型も凡てが焼けて了つたことを見届けた。私は改造社に廻る余裕を持つて居らなかつた。然し改造社も完全に破壊せられてゐることを予知してゐた。

その晩私は再び遠い道を歩いて、芝の白金の明治学院まで帰つて来た。そして翌朝八時半品川発の列車で東神奈川まで出た。

私は横浜に多くの知己を持つてゐた。私の妻の従弟は山下町にある相場に大きな印刷会社の社長であり、私と妻との結婚を媒酌してくれた人はその支配人であつた。それで余程それらの人々の運命を尋ねたかつたが、私は自分の血縁知己の人々を尋ねる為めに来たのではなく、全く東と西とのキリスト教の救援団体の連絡を取りに来たのだから、一刻も早くその連絡を取ることに努めなくてはならぬと思つたので、私事を顧ることを全く抛擲した。そしてまた郵船会社の三島丸へのランチの出る横浜ドック会社の波止場に来た。

後で知つたことであつたが、妻の従弟の印刷工場では約四百名の職工(その中の多くは製本女工)の内、逃れ得たものは僅かに八名位で、社長、支配人其外凡ての職工は煉瓦の下に埋れて死んで了つたと云ふことであつた。

私は横浜に着いた時から氣になつて居たが、それを聞いて一層横浜の惨害の甚だしかつたことを思つた。なんでも横浜の山下町の住民で助かつたものは全人口の二割以下であらうと云ふことであつた。

私は三島丸に来て、国際汽船の材木船東華丸がその日の午後清水港に向つて出帆することを知つた。そして、同社の丸山氏の好意によ

り 出帆しかけた東華丸のあとを追ひかけて清水まで運んでもらつた。

翌朝 私は朝早く駿河湾頭に立つ富士の高根を仰いだが 富士の姿が実に醜く見えた。よく見ると 形が明かに変つてゐる。こんな富士山の形なら この湾の富士のすきであつた高山樗牛も賞美はしなかつたであらうと思つた。

「あゝ 富士までが狂うてゐる！」と私は心の内で思つた。

帆船に乗つて 清水港に上陸したのは九時一寸前であつた。その日は三保の美しさも 羽衣松の神秘をも考へる余地がなかつた。私はたゞ京浜の惨状が眼の前に浮んで 如何にしてか それを救ひたいと思ふ一念で一杯であつた。

帰つて来てから 二日間は十分眠ることが出来なかつた。日が立つと共にその惨状が現実的になるのであつた。つまり私は夢心地で東京 横浜を歩いて来たことと云ふことを知つた。そこを歩いてゐる間私は涙を一滴だに流さなかつた。そして 涙を流してゐる人をも見なかつた。然し そこを去つて 神戸に帰つて一瞑想すると 私の眼には涙が滲むのを覚える。

「あゝ Mも死んだ。Sも死んだ。誰れもやられた」

さう思ふだけでも悲惨なのに 私はそれが幾十万人であることを思ふと ちつとして居られない。

今 私は全く精神的無能力者のやうに茫然として机の前に坐つてゐる。私は何から手をつけて善いやらわからない。

先づ 東京 横浜の疵口を癒やさねばならぬ。その癒える日まで私は半狂乱者である。

## 焦土を彩色せんとして

天幕に日は暮れた。

田井君が 蠟燭に火をつけて持つて来た。まだ折畳み式のキャンバスベッドもその儘になつてゐるし 夕飯も食はずに居た。

横川小学校の小使さんが 夕飯に案内してくれた。私等三人は薄葉君ひとり TENTに残して 小学校の小使室に 夕飯の御馳走になり行つた。黒味噌の中に貝が遣入つてゐた。それでも震災當時のことを思ふと大きな御馳走である。感謝して戴いて薄葉君と代つた。

蠟燭の火で七つの寝台をひろげ 四つを我等四人の寝台にあて二つを椅子代りに使用し残りの一つには荷物を一杯にのせた。

九月二日に神戸を船で立つた私は四日には芝の明治学院で寝た。東京に五日六日とゐたがキリスト教の救護団に金が一文も無いことを知つたので 直に神戸に引返して来た。そして約四十回の講演会に七千五百円近くの入場料と席上義捐金を得て それを東京に送つたが 私は十月五日 神戸に帰り 七日また東京に向つて 出発した。そして今度は 東京横浜の救済事業を徹底的に研究し この冬の防寒運動に参加したいと思つて出かけた。その時私は内務省 東京府 東京市を各々訪問して蒲団に対する用意が不十分であることを知つた。それで 私は直に十月十四日 神戸に引返し 大阪朝日新聞社後援の全関西婦人聯合大会に 蒲団の欠乏を訴へた。

そして 十月十六日 直にイエス団の同志四人と一緒に船で東上